

# 自動車メーカーによる 「高齢運転者事故防止対策プログラム」(概要)

---

- 国土交通省は、相次ぐ高齢運転者による交通事故を受けて、国内乗用車メーカー8社※に対し、「高齢運転者事故防止対策プログラム」の策定を要請。

(※)スズキ、ダイハツ工業、トヨタ自動車、日産自動車、富士重工業、本田技研工業、マツダ、三菱自動車工業

### <要請のポイント>

- ・ 高齢運転者による事故防止のためには、自動ブレーキなど、先進安全技術の性能向上と普及促進が重要。
- ・ 対策のスピード感の観点からは、後付け可能な安全装置の開発、先進安全技術の幅広い車種への標準装備化、ディーラー等における販売促進など、市場における普及促進策の検討も必要。
- ・ 以上を踏まえ、自動車メーカーに対し、高齢運転者事故防止対策プログラムの策定を要請。

① 軽自動車メーカーへの要請  
(平成28年12月実施)

② 普通自動車メーカーへの要請  
(平成29年1月実施)



根本大臣政務官による軽自動車メーカーへの要請(平成28年12月21日)

国内乗用車メーカー8社から国土交通省に対し、「高齢運転者事故防止対策プログラム」提出。

※ 各社から提出されたプログラムは、新車の開発・販売計画等の企業情報を含むことから、個別の公表は行わない。

## 総論

- 各社は、高齢運転者の事故防止対策の重要性を認識し、先進安全技術の研究開発の促進、事業計画の一部前倒しを含む先進安全技術の機能向上及び搭載拡大(一部は標準装備化)、ディーラー等における普及・啓発等に取り組む。

## 高齢者の安全運転に資する先進安全技術

各社が、高齢運転者の安全運転に資すると考える先進安全技術※は以下の通り。

※ 今後、開発・実用化予定の技術を含む。

- 全社が「自動ブレーキ」と「ペダル踏み間違い時加速抑制装置」を挙げた。
- 8社中7社が自動切替型前照灯、自動防眩型前照灯などの「先進的なライト」を挙げた。
- このほか、各社から挙げられた主な技術は以下の通り。

車線逸脱警報装置

車線維持支援制御装置

逆走防止装置(カーナビ連携)

車両後側方検知機能(ブラインドスポット検知機能)

アラウンドビューモニター

先行車発進お知らせ機能

ふらつき注意喚起装置

リアビューカメラ

ドライバーモニタリング装置

道路標識認識装置

クルーズコントロール

オートライト

交差点安全支援機能(TSPS※1／DSSS※2)

衝突警報

ヘッドアップディスプレイ

後退時接近移動体注意喚起・警報装置

後退時自動ブレーキ

駐車支援機能(自動駐車)

など

※1 Traffic Signal Prediction Systems(信号情報活用運転支援システム)の略

※2 Driving Safety Support Systems(安全運転支援システム)の略

## 自動ブレーキとペダル踏み間違い時加速抑制装置の性能向上と搭載拡大

- 各社、自動ブレーキ及びペダル踏み間違い時加速抑制装置の設定車種の拡大※に取り組む。この結果、2020年までに、ほぼ全ての車種(新車乗用車)に標準装備又はオプション設定される見通し。

※ 各社、主要車種やユーザーの価格受容性が高い車種・グレードを中心に、標準装備の拡大を進める。  
価格に敏感なユーザー層に対応した車種等では、オプション設定(購入者による選択)が残る

- 各社、自動ブレーキの性能向上に取り組む。この結果、2020年までに、新車に搭載される自動ブレーキのうち、ほとんどが歩行者を検知可能となる見通し。

## 先進安全技術を搭載した自動車の販売促進・啓発

- 各社は、先進安全技術を搭載した自動車の販売促進・啓発のため、以下のような取組みを講ずる。
- 安全機能パッケージや、安全特別仕様車の設定
  - 販売員に対する取組み
    - ・ 顧客への説明ツール(パンフレット、タブレット端末等)の作成、展開
    - ・ 販売員に対する商品教育、試乗会
  - 運転者・購入者に対する働きかけ
    - ・ 試乗会(ドライビングスクール、大型商業施設、ディーラー等)  
※ 安全確保に十分に留意し、適切な場所において実施
    - ・ 安全機能のバーチャル・リアリティ体験
    - ・ 高齢運転者の家族への働きかけ
- 各社は、ユーザーへの説明や試乗会において、先進安全技術の機能・効果の説明と併せて、機能の限界や使用上の注意点等についても、詳しく説明を行う。

## 後付けの安全装置、貨物車への対応

- 一部メーカーは、自社ディーラーにおいて、後付けの警報装置（衝突警報、車線逸脱警報等）の販売・取付けを行う（又はそのような対応について検討する）。
- 各社、バン型等の貨物車についても、自動ブレーキ等の開発を進め、フルモデルチェンジ等の機会を捉え、可能なものから順次搭載していく。